

忘れられた叡智を求めて

第3回

なぜ、世界経済危機が起こったのか。

この問いに対して、経済学者は様々な答えを語るが、実は、あまり語られていないことがある。

現代の経済システムが、極めて高度な「複雑系」になり、「複雑系経済」と呼ばれるものになっていくからである。

では、「複雑系」とは何か。

この言葉は、かつて一九九〇年代にブームとなった言葉であるが、現在も科学の最先端で研究が進められているテーマである。

しかし、この言葉の意味を知るためには、難解な科学の用語を学ぶよりも、かつて文化人類学者のグレゴリー・ベイトソンが語った言葉を思い起こすべきであろう。

「複雑なものには、生命が宿

「バタフライエコノミー」の時代が始まっている

る」

このベイトソンの言葉のごとく、企業や市場や社会などのシステムは、情報革命によってその複雑性を高めるにつれ、「生命的システム」としての性質を強めていく。

例えば、「自己組織化」や「創発」、「生態系の形成」、「進化」や「相互進化」など、生命的な性質を強めていくのである。

そして、こうした性質の中でも特に重要なのは、システムの片隅の小さなゆらぎが、システム全体の大変動をもたらす性質、いわゆる「バタフライ効果」である。

これは、現代科学のカオス理論で使われ始めた言葉であるが、「北京で蝶々が羽ばたくと、ニューヨークでハリケーンが起こる」という比喩

から生まれた言葉である。

そして、世界経済危機は、まさに「複雑系」としての経済が、その「バタフライ効果」を劇的に示した事例に他ならない。アメリカの住宅産業の片隅で起こったローンの破綻が、瞬く間に世界全体を経済危機に巻き込むという現象は、典型的な「バタフライ効果」に他ならない。

このように、現代の経済は、この「バタフライ効果」が頻繁に起こる経済となっており、いわば「バタフライエコノミー」とでも呼ぶべきものになっているのである。

では、なぜ、現代の経済学は、こうした「複雑系経済」に対して無力なのか。

その理由も明確である。経済というものを「生命的システム」として扱うのでは

なく、「機械的システム」として扱い、経済のメカニズム（機構）を精緻に分析・解明すれば、自由に経済をコントロールできるという幻想に立脚しているからである。

例えば、経済現象を数学モデルで表す「数理経済学」。サブプライム問題を引き起こした「金融工学」。これらはいずれも、経済を「機械的システム」と見なし、数学的手法や工学的手法を駆使することによって、その挙動やリスクを自由にコントロールできるとの幻想に立脚している。

では、この「生命的システム」としての経済に、どう処すればよいのか。

その叡智は、実は、最先端の科学や経済学にはなく、東洋的な叡智の中にある。次回、そのことを語ろう。



田坂広志

【多摩大学大学院教授
シンクタンク・ソフィア
バンク代表】